

青山同窓会
会報

発行所
青山同窓会
新潟市関屋下川原町二
新潟 高校内

印刷所 **オリオン印刷株式会社**

会長あいさつ

同窓会発展を希う

青山同窓会会長 鍵 富清 一郎



暑中お見舞い申し上げます。今年 は集中豪雨があつたと思つと、梅雨明けから、酷暑つづきです。それでもお互い元気で、総会に顔を合せて、楽しくやれることを感じたいものです。

愛校心と報校心

東京青山同窓会会長

山崎 重三 二郎

東京青山同窓会では、只今約二〇〇名会員を対象とした名簿作りに取り組んでいます。役員各位のその努力に対して心から敬服し、感謝している次第です。これは三年來の計画的事業であり、本年末完成を目前としており、完成の暁には新潟の本家に対しても貢献するところありと信じております。

私と同窓会を支えているものは、会員の愛校心と報校心であると曰ふ。私には、愛校心と報校心とを、京の私立中学、年生であつた私は所謂、焼け出し組となつて帰郷し、新潟中学に転校しました。流石に県立一中と謂われるだけあつてその偉容は驚く程でした。柔剣道は正課に組み入れられ、各種のクラブ活動は活発であり運動場は広大でよく整備されており、都心の私立中学の様に朝礼もやつとという中庭程度の校庭とは雲泥の差でした。

- 2面 ☆よくやった陸上競技部 ☆おらが青山時代
- 3面 ☆ボート部OB会 ☆39回
- 4面 ☆栄光の記録バトミントン部
- 5面 ☆坂口献吉と県民会館
- 6面 ☆Uターン変わり種 ☆虎先生 ☆54・55期
- 7面 ☆砂丘の思い出 ☆栗栖閣下の思い出
- 8面 ☆20年前の女子高生

昭和53年度職員異動

●全日制よりの転出

氏名 新任校
齋藤敏夫先生 柏崎商業(校長)
奈良孝基先生 十日町高校(定教頭)
星 智信先生 中条高校(定教頭)

●通信制よりの転出

池田 齊先生 中越教育事務所
遠藤良吉先生 新潟商業
加藤圭介先生 新潟南高校
長谷部昇先生 県教育委員会
三ツ井富士夫先生 新潟江南高校
若林治尚先生 新潟中央高校
赤井田秀光先生 新潟全日制
小島キヨさん 新潟東工業
鷲尾タカさん 県統計課

●転入

氏名 旧任教
早川 宏先生 三条高校(教頭)
鈴木政光先生 巻高校
宮田久哉先生 村上桜ヶ丘高校
宮田新太郎先生 栃尾高校
赤井田秀光先生 新潟通信制
石崎静夫先生 新潟通信制
服部晃治先生 新潟通信制
皆川喜代弘先生 新津高校
平林和郎先生 五泉高校
橋詰恒雄先生 西川竹園高校
廣沢 功先生 三条高校
飯島重衛先生 新発田高校
山根美智子さん 中条高校
新潟中央高校

ある恩師

上杉 雅之 (60回) (校内幹事)

▲「君、わかつたかね?」君に在しているとして高校生の生活を判で押したように取り上げている。世間もこれに迎合して「人間教育、人間教育を」と叫んでいるかみえる。一体、人間教育とは何なのであるか。高校とは何を以てしる就職にしろ、勉学こそが人間教育の根本であるはずである。人間教育の場を放棄した高校はすでに人間教育の場を失つていっているといふ。

▲「君、わかつたかね?」君達、わかつたかね?」火の出るようなこの情熱的な言葉を果してわれわれ教師は口にはしているであろうか。数多くの大学受験生がいる教室に出て、その鋭い眼差しに接するときに思わず頭の下がる思いがするときがある。スポーツ活動が若さの発露なら、勉学も若さ故に情熱を燃やし取り組む対象であるべきだ。スポーツにしろ、勉学にしろ訓練不足、予習不足があるのは止むを得ないが、師弟共に「足りなかつた?」すまなかつた?」の気持ちを秘めながら再出発する。この態度が人間教育の場に今も、とも求められてよいのではないだろうか。

随想

▲「君、わかつたかね?」君達、わかつたかね?」を教室にこたえさせた齊川正敏先生を明日にも訪ねてみたいと思つている。

よくやった！陸上競技部

北信越大会で400mリレー優勝

陸上競技部部长 本多 剛 (三年八組)



私達陸上競技部は、この四月、新たに十一名の新部員を迎え(総勢二十五名)全国高校総体を目標に練習を積み重ねてきました。そして下越地区大会県高校総体を好成績で通過し、先日富山県高岡市で行われた、全国大会出場への最終関門である北信越大会でも、激しいデッドヒートの結果、優勝することができ、その出場権を得ることができました。一昨年、昨年と県総体、北信越大会まで出場はしましたが、どうしても全国大会出場までには及ばなかった種目で、全国大会出場は、私達の念願でも

あっただけにその喜びもひとしおでした。四百リレー優勝は、三浦先生の記憶にもないそうで、全国大会出場は、三条、宮村先輩時代以来のことだそうです。これを果したし得たのも、三浦、宮田両先生はじめ、諸先輩方の激しくも厳しい中、やさしさに満ちた御指導を受け、すぐれた後輩にも恵まれて本当に幸運でした。

二十数年来、陸上部の全国大会出場は絶えたことがないということですが、今年もそれが、絶えずに続いたということも私達にはうれしいことです。

昨年秋の新人戦では決勝へ出場することもできず、その悔やしさを冬期練習にぶつけ、再び基本に戻り、ウエイトトレーニング等も十分に行い(練習を休んだのは年末年始の三日間のみ)健康管理にも注意しながら練習をしました。そして三月、いよいよシーズン前の準備期とも言うべき段階になって、三條先輩(現筑波大学大学院)が御指導に来て下さり、冬期練習では不足だった走り込みを中心に練習を行いました。後期への大きな力となりました。ありがとうございました。

下越地区大会を通過することができましたが、最近の陸上人口の増加に伴って今年の県総体は、特に激戦の前評判が高く、私達も相当の苦戦が予想されました。そこで県総体まではわずかな期間でしたが、バトンパスを中心に練習を行い無事通過することができました。その後、北信越大会までの期間は、とにかく後悔することのないように、できる限りの練習をしていこうと練習のスケジュールを立て、安易な妥協をしないようにみんなを励まし合つて練習を行い

ました。その頃になって私達一人一人にも全国大会への意欲が感じられるようになり、これなら必ずやれるという自信を持って北信越大会に望みました。個人種目ですべてに全国大会出場は絶たれていたこともあって、リレーにすべてを賭けようとな夜の先生を囲んでのミーティングで話しました。当日、みんなでウォーミングアップをやりながら、実際、我々よりも記録の良いチームも二、三あるけれどとにかく予選から全力でいこう、と確認し合い競技に望みました。予選・準決勝と一位で通過することができました。そして決勝ではバトンパスも最高のできてしたが、第四走者早山君にバトンが渡った時には一位という状態であったのを彼が悠悠と抜き去って

ベスト記録 四十二秒四で優勝することができました。これも常に私達を御支援して下さいておられる諸先輩方のおかげだと心から感謝しています。本当にありがとうございました。

振り返ってみると、新潟高校陸上部に加入して本当によかったと思えます。陸上競技の最も素晴らしい場面を体験させてもらいました。青山陸上部の輝かしい伝統の中に生き続ける、先輩と後輩の強い温かい絆こそ私達を支えてくれた最大のものです。

八月の全国大会でも、多くの先輩方の築かれた伝統に報いるように頑張ってきました。そしてその輝かしい伝統を守り、後輩に引き継いでいくつもりです。

年、新潟医学専門学校の運動会の特別番組、県中等学校八百米選手権競走に勝って優勝旗をさげた自称紅顔の美少年の私と山下隆吉君である。(一校一名参加で、二等をとる。)

当時の医専の運動会は、一般の催し物の少い頃でもあり、医学生、医務員、看護婦さんの余興的参加もあって、白山祭とならぶ行事みたいなもので市民の老若婦女子が弁当持ちで大ぜい見物にやってきました。

この競争には、三年連続優勝校に優勝旗が水く授与されることになっていて、毎年この優勝旗をめぐる争奪戦がくりひろげられた。ある年はわれらの長谷川先輩がスパイクされて血みどろの足で最後まで力走したこともあったが、残念ながら優勝できなかった。毎年夕開せまる校庭に嵐と引き上げた全校生徒の前に、五年生がかかるがわる悲憤慷慨のガイタン演説で、非愛校の生徒の批判攻撃、制裁にまで及ぶような雰囲気、下級生の私等はビクビクしていた。

私は畏友早山隆三君にすすめられて、三年生の終り頃競技部(當時はまだ徒歩部といた)に入り旧制新潟高校の先輩、古山監督の指導を受けた。投擲や跳躍に自信がないので、八百米優勝に執念を燃やした。

この年十月八日は、わが執念の医専の運動会である。しかも、医科大学に移行するので、新潟医専としては最後の運動会であるから中等学校八百米競争の優勝旗は、過去の戦績には関係なく、今年の優勝校に永久授与するという事になった。

「よし、やっつたので……」とかね、ん調で云つたわけではないが、開演をたぎらせて、一周二百米の仮設の細張トラックのスタートに立った。

勝った。勝った。山下君もつづいて二等。私は優勝旗を持って、古山先輩、竹内玉将、早山隆三等の競技部主脳を先頭に、全校生徒が学校町から、母校まで、「譁たなびく」や「つものら」を絶叫して、凱旋行進した。

本文中の写真は、この時の感激的シーンで、翌朝の新潟毎日新聞(今の「新潟日報」)にスタートの写真とともに大きく記事も加えて掲載された。

おらが青山時代

大正12年 第34回卒 湊元克巳



汗と血と涙の優勝旗
ここにかかげた写真は、大正十年とつて先の望みや楽しみがなくとも昔の自慢話や回顧談がしたくなる。お読み下されば有りがたい。

県下無敵の青山競技部
県下中等学校陸上競技会、第一回、第二回とも弥彦のグラウンドで行われた。当時まだ神宮競技場もなく、全国にはほとんど四百米の完備したトラックなどなかった時



代た。その頃新潟県は県の一の宮
弥彦の神苑をギリシャのオリンピ
アードになぞらえて、四百米のト
ラックとフィールドを建設した。
その頃の当事者の先覚的英断に
敬意と感謝をささげる。今はどう
だ、この陸上競技の聖地は、ギヤ
ンプルの競輪場と化し、県のテラ
銭かせぎの場に墮落した。
われらの先輩達はこの聖地で奮
闘した。

第一回大会の記録は手元になく
て省略。

第二回、大正七年、新潟中学、
新潟師範は同成績で一位。古山利
雄(健在) 小林栄太郎(健在) 安
宅博恵氏等の先輩たちや、勝利者
の名は厚い大きな木の板に刻まれ
て、神社に掲げられた。今でも保
存されていると思う。

第三回、大正十年九月二十日、
会場は新潟師範グラウンド、新潟中
学、圧勝優勝。全種目十五のうち
入賞しなかったのは砲丸投げだけで
あと殆んど全種目に一等となり、
数種目、二等であった。この時の
早山隆二、山口直三、北村大市君
などは日本の代表に選ばれる程強
かった。

全国征覇の夢
当時陸連主催の全国中学校対抗
競技大会は、春秋一回、東京農大
駒場グラウンドで催された。

大正十一年五月。私と山下隆吉
君出場、湊元、八百米一等、四百
米等、山下、千五百米、等、八
百米、等、二人で得点計全国四
つない。

位。同年九月の大会には、絶対
全国優勝を期して、精鋭十余名で
出場した。それが残念。夏休の猛
練習で、私が足の裏に底豆をつく
り、化膿して、やっと歩ける様な
状態での大会を迎えたのである。
入場式には参加したが、私は一
点もとれず、青山陸上部全国征覇
の夢は消えた。

主将としての責任も果せず、チ
ームや学校、郷党の期待を裏切っ
たことを考えると今までに無念であ
る。

おわりに一言
昭和二十九年の母校火災で、先
輩や私らが血と涙でつた優勝旗
や、栄光の記念品、その他の記録
などが焼滅したことは残念でたま
らない。

青山の伝統や歴史の保存、青山
精神の伝承がなければ同窓会は無
意味だと思ふ。この保存と後世へ
の伝達は今後の同窓会の重要な課
題だと思ふ。

余談
この写真の原板を、一昨年の暮
れ、東京而立会(新中第二十四回
卒業生のクラス会)に出席した三
十二回卒業の齋藤英二君から「い
いものをプレゼントする。」と云っ
て渡された。齋藤君は石油事業家
で、初代の大協石油の社長である。
私は金目のものかと賤しい想像
をして開いたら、この写真とガラ
スのキャビネ原板一枚で、私にと
つては金で買えない貴重な品だ。
どうして今頃こんなもの、と

開いたら事情はこうだ。彼は中学
時代から写真マニアで、記録写真
芸術写真の撮影、収集に熱中し、
同級の洋画家志望の曾我英彦君と
写真と洋画の個展を新潟毎日新聞
社で開き、そのため、中学から、

ボート部OB会

青山艇友会幹事長

75回 渡 辺 研 二

新潟中学、新潟高校のボート部
OB会である「青山艇友会」の第
一回定時総会は、昭和52年2月25
日(土)、新潟市の田中ホテルにお
いて四十五名の出席を得て開催さ
れました。総会終了後は懇親会を
開催いたしました。盛況裡に終
始し、大変意義深いものがありま
した。役員は次の諸氏です(ご
紹介致します)。

- 会長 鹿取邦男 45回
- 副会長 砂山 晃 55回
- 副会長 佐藤 章 64回
- 幹事長 渡辺研二 75回
- 幹事 富田省一 72回
- 幹事 吉田芳郎 75回
- 幹事 佐藤正昭 80回
- 幹事 加藤高弘 58回
- 監事 小町聡敏 69回

昨年OB会設立総会で規約等
の決定をし、正式名称を「青山艇
友会」として滑りだしたのですが
無事に第一回定時総会を挙行でき
たことはたいへん喜ばしいことと
思います。



青山艇友会第一回定時総会

授をするべく頑張っていく所存で
す。

◎部旗を母校漕艇部へ贈呈。
◎青山・江風定期戦の実施。
(これはOBも積極的に参加
し意気盛ん)

◎艇庫老朽化のため艇庫新築運
動の実施。
等々の運動を第一日目から積極
的に行っております。また会員名
簿も整備され、53年5月には発行
の予定です。
なんとか順調にスタートをきっ
た青山艇友会ですが、今後の益々
の発展のためにOBの方々のご協
力をお願いいたします次第です。

三十九回 新緑の集い

さつきの花と庭樹の緑にさわや
かな夕風の吹きたる五月十三日
(土)午後六時より、市内小葛旅館
の庭園に面した広間に一回、十一
名が顔を合せた。

季節よく、酒は佳、心こめられ
た膳の料理にゆったりした座敷か
ら暮れなづむ庭を眺めての楽しい、
久々の会合であった。

青山三十九回同期諸氏の御健在を
祈る。

当日出席者は左の通り
木村豊雄 野沢正一 小林芳輔
阿部尚道 吉田二郎 桜井輝三
高橋栄一 今井正雄 高橋茂登吉
佐藤一義 藤木得司 皆川竹次郎

小飯塚元 阿部助哉 坂井喬 郎
白鶴誠一 小武内尚二 赤塚俊輔
藤巻行也 大塚信一 福山 健
く追記

昭和五十七年は我々三十九回同期
の母校卒業五十周年に当る。昭和
七年三月卒、二二四名)人生の一
つの曲り角として盛大に五十周年
の会合を開きたいものと予定して
いる。それにしても毎回開かれる
東京での青山同窓会に同期の出席
者は一人名とか(木村豊雄君談
世話役不在のため同期間の連絡が
とれぬのか、主催者側の案内不足
かとはもかくとして、東京都内及
びその近くには大野恵司君、小和
田岩夫君、前田貞正君、村田鷹君
清野春二君、若槻繁君、出塚浩一
君、松谷由夫君、中村健君……等
々多数の旧友諸氏が健在のはず。
どうか先づ一年一回開催の東京青
山同窓会に出席されるよう、宜敷
しくおたのみします(福山記)

67回卒業二十周年
記念同級会を計画
六十七回卒は昭和三十四年春の
卒業であり、来春には卒業二十周
年目を迎えることになる。それで
記念の同級会を来年の盆頃にや
らうと、目下計画の下準備中であ
る。それにはまず、正確な住所録
の作成が必要であるので、六十七
回卒(新制第十一回)の消息につ
いて右へお知らせ下さい。
千九五一
新潟市白山浦一 オリオン印刷
石田瑞穂 電66八二一八

栄光の記録「バドミントン部」 再生のシャトルにかけた創設の頃

59回 高見 広治
(新大本部)

現在、バドミントンを愛好する若者達に「再生シャトル」などという耳なれない言葉は理解できないであろう。

一八七〇年代、インドより、イギリス本国へ持ち帰られ、バドミントンと呼ばれるようになり、一八八七年、イギリスで競技規則が作られ、以後、世界の国々に拡がって行ったが、日本へ入った歴史等はさておき、我が新潟高校で行われたのは、新潟中学校から新潟高校へとカンバンが変わった翌年昭和二十四年であった。当時バドミントンも、他の外来スポーツと同様、文部省等が力を入れ、大いに推奨していた体育種目の一つであり、新しいスポーツの指導講習会も、各学校の体育教官を集めて開催されていたようであるが、これに参加されたのは体育教官の戸川右兵衛氏(元曾野木中学校長)であり、先生の肝入りで、我々二年生の後半、クラブ形式で練習を始めたのであった。練習場は大体講堂と西控所であったが、現在の規定では床面より八米以上なければならないとされているが、当時としては市内の高校の講堂の中でも天井が一番高かった。

練習についても他のクラブとの関連もあり、新参者である自覚もあり、他のクラブの練習時間帯をさけて、時間帯を決めて、夏の真盛りで、他のクラブが練習を終えて帰る頃始めた事もあった。その甲斐あってか、二十五年九月の県の高校総体兼国体予選ダブルスで高見、浜田組(当時二年)が三位に入賞、同月の県選手権では、高校男子復で、高見、松田(新潟県工)が三位、十一月の県高校体育大会の男子復に、高見、松田が三位と入賞を果たし、又、新潟市民大会へも参加、八月、高校男子単で高見が三位、同月、男子A級で一位の記録を取った。

このようにクラブを組織して以来、一年たらずで、上記の実績を残すことのできたのは、ひとえに練習の成果に他ならない。

この頃、新潟市内でバドミントンをやっていた高校は、男子で新潟市工、新潟商業、新潟県工、女子は、新潟中央、沼垂、新潟女子工芸(現在の新潟青陵)であり、男子では新潟市工が我々より約一年前に始めた関係もあって、県内では群を抜いていたが、次に新潟高校が三位以下を引き離していた。又、当時、県協会の役員もジュニア育成に力を入れており、指導組織に新潟市内の一流選手を集めて新潟クラブを結成しており、練習場確保に困っていた選手達に二葉中学を午後七時〜九時まで借用して練習会をもちたり、当時、全日本のトップに登臨していた慶応

ニア育成に力を入れており、指導組織に新潟市内の一流選手を集めて新潟クラブを結成しており、練習場確保に困っていた選手達に二葉中学を午後七時〜九時まで借用して練習会をもちたり、当時、全日本のトップに登臨していた慶応

この頃は、シャトルを購入するに頭を痛めたものだ。一ヶ六〇八〇円位であったように記憶しているが、クラブ活動の予算にも限りがあり、我々最上級生がシャトルの消費係、一年下の二年生らは、シャトルの調達係、その調達方法も生活の知恵とでも云うのか西堀九番町のどり梅、本宅の裏に鶏舎がついていた所へ鶏の羽を仕入れに持って学校へ持ち帰り、昼休みか、放課後、シャトルの羽の長さに切り、使いふるしのシャトルのコルクの台へ一本一本埋めセメンダインで固め、乾いた頃、羽を糸でつなぎとめる手工芸をやったのけた。これが謂ゆる再生シャトルである。切羽つまつてのこととはいえ我々上級生としては誠に申し訳なく思っていた次第である。当時マネージャーは二年生の土谷茂己(昭和三十年全日本選手権混合複第一位)であり、非常に苦勞していたのが喉に浮かぶ。細面で、能面の様な容貌から、下級生に注意を与える反面、後輩の卒業生などには麻雀、競馬のコーチ返していたようだ。その彼も数年経ってしまつた。我々は心の底から哀悼の意を表す。(合掌)

この頃は、シャトルを購入するに頭を痛めたものだ。一ヶ六〇八〇円位であったように記憶しているが、クラブ活動の予算にも限りがあり、我々最上級生がシャトルの消費係、一年下の二年生らは、シャトルの調達係、その調達方法も生活の知恵とでも云うのか西堀九番町のどり梅、本宅の裏に鶏舎がついていた所へ鶏の羽を仕入れに持って学校へ持ち帰り、昼休みか、放課後、シャトルの羽の長さに切り、使いふるしのシャトルのコルクの台へ一本一本埋めセメンダインで固め、乾いた頃、羽を糸でつなぎとめる手工芸をやったのけた。これが謂ゆる再生シャトルである。切羽つまつてのこととはいえ我々上級生としては誠に申し訳なく思っていた次第である。当時マネージャーは二年生の土谷茂己(昭和三十年全日本選手権混合複第一位)であり、非常に苦勞していたのが喉に浮かぶ。細面で、能面の様な容貌から、下級生に注意を与える反面、後輩の卒業生などには麻雀、競馬のコーチ返していたようだ。その彼も数年経ってしまつた。我々は心の底から哀悼の意を表す。(合掌)

後輩達の心のこもつた再生シャトルで練習した甲斐あって、二十六年一月横浜フレイザージムを会場に、高松宮両殿下をお迎えした第一回全国高校選手権に出場、二年生が受験のため、出場経費も正武運動部でないため、殆んど自己負担という関係上、レギュラーを二

が伝統の礎となつたのか、以後、県内では向うところ敵なく、全国高校選手権には常時出場。ベスト八・四位、三位、もかなり獲得していた。十周年、二十周年、記念事業で晴れの全国表彰を受けている。又国民体育大会には、二十六年から、司山次夫(旧姓伊東、現新潟市役所)が、先輩、一般男子の選出に多量の選手を送り、毎年上位入賞者を出していた様記憶している。

この頃は、シャトルを購入するに頭を痛めたものだ。一ヶ六〇八〇円位であったように記憶しているが、クラブ活動の予算にも限りがあり、我々最上級生がシャトルの消費係、一年下の二年生らは、シャトルの調達係、その調達方法も生活の知恵とでも云うのか西堀九番町のどり梅、本宅の裏に鶏舎がついていた所へ鶏の羽を仕入れに持って学校へ持ち帰り、昼休みか、放課後、シャトルの羽の長さに切り、使いふるしのシャトルのコルクの台へ一本一本埋めセメンダインで固め、乾いた頃、羽を糸でつなぎとめる手工芸をやったのけた。これが謂ゆる再生シャトルである。切羽つまつてのこととはいえ我々上級生としては誠に申し訳なく思っていた次第である。当時マネージャーは二年生の土谷茂己(昭和三十年全日本選手権混合複第一位)であり、非常に苦勞していたのが喉に浮かぶ。細面で、能面の様な容貌から、下級生に注意を与える反面、後輩の卒業生などには麻雀、競馬のコーチ返していたようだ。その彼も数年経ってしまつた。我々は心の底から哀悼の意を表す。(合掌)

東京の大学へもバドミントンの腕を買われて入学した選手も多くその中には全日本クラスの選手、各大学のキャプテンを務めた人も何人もおり、当時は新潟高校の名

が伝統の礎となつたのか、以後、県内では向うところ敵なく、全国高校選手権には常時出場。ベスト八・四位、三位、もかなり獲得していた。十周年、二十周年、記念事業で晴れの全国表彰を受けている。又国民体育大会には、二十六年から、司山次夫(旧姓伊東、現新潟市役所)が、先輩、一般男子の選出に多量の選手を送り、毎年上位入賞者を出していた様記憶している。

声を全国に高めたものであった。正式にクラブ活動から、部に昇格したのは二十六年であった。創設当時の苦しさも、今になって思いをめぐらすとき、非常にすかしく、二十数年間は夢の如くである。私が記憶をたどりながら、創設期の頃の事を書いたつもりであるが、記憶違い等があればお許しを願いたい。

最後に、益々活躍されんことを願いつつ筆をおく。

最後に、益々活躍されんことを願いつつ筆をおく。

最後に、益々活躍されんことを願いつつ筆をおく。



大学の合宿を新潟に誘致して、一流プレイヤーと地元選手と合同練習を開いたり、並々ならぬ気合を入れていたようであった。猶、女



声を全国に高めたものであった。正式にクラブ活動から、部に昇格したのは二十六年であった。創設当時の苦しさも、今になって思いをめぐらすとき、非常にすかしく、二十数年間は夢の如くである。私が記憶をたどりながら、創設期の頃の事を書いたつもりであるが、記憶違い等があればお許しを願いたい。

坂口献吉さんと県民会館

詩碑建設にあたって

38回 近藤 圓
(ヒヨイ白蟻研究所 常務取締役)

○不思議な因縁

世の中には不思議な因縁というものがあるものらしい。先輩会津八一先生の十三回忌に当る昭和四十二年に私は「会津八一先生の歌碑を母校に」という提唱文を書き、翌年一月の青山同窓会報に出していただいた。幸いに同窓各位の賛同を得て八十周年記念事業の一つとしてとり上げられ、私もその建設委員となって四十七年秋、母校の前庭に建設をみた。



北越詩話の著者の長男として、明治二十八年八月生れた。文壇の偉材坂口安吾の長兄である。

昭和四十年早春のころであった。前年の新潟地震の際に全国から寄

へ相談に來られた。私は当時県高体連の事務局長でスポーツ大会の開催屋のようなことをしていたが全面的に御力になることを約し、反対者を説得する策案をあれこれと指導申し上げた。

○敷地確保で苦境に

昭和四十年早春のころであった。前年の新潟地震の際に全国から寄

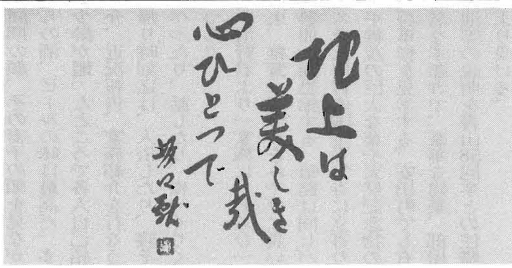
日は市長室に於けるスポーツ関係者と議論後、一般県民があまりにも問題の本質を知らなせんので、たまたま反対論者の投書が出ました機会に、それに対抗して私も投書で県民会館建設の本質を説いた次第ですが、つづいて先生の御投稿がタイムリよく出ましたので、本当にありがたく厚く御礼申し上げます。(坂口献吉追悼録、近藤圓宛の手紙から抜萃)と申され私の協力を大変喜んでおられたようである。

○県民会館は誕生したが

このように、あの温厚寡黙な坂口さんのどこにこんなファイトがあったのかと思えるほどの熱意と頑張りで、白山球場存続を叫ぶ諸団体との折衝に奔走された。そして坂口さんの高潔な御人格と御熱意が反対者をも動かし、昭和四十二年十一月白山球場の地に、震災復興記念新潟県民会館美術博物館が誕生したのである。しかし坂口さんはこの落成を待たぬまま昭和四十一年八月十三日に忽焉として瞑目されたのであるが御苦心を知る者として残念でたまらない気持ちである。

○碑碑を提唱する

県民会館の創立満三周年の四十五年の秋、私は日報投書欄に「前略」坂口先生のこの努力がなければ県民会館はおそらく競馬場跡あたりへ建てられていたかもしれない。今日の隆盛は実に坂口先生の執念のたまものである。願わくは会館の一隅に先生の記念碑を建立して遺徳を顕彰するとともに、か



たのであったが実現に至らなかった。これは坂口さんの奥さんが「主人はそういうことを好む人ではありませぬので……」と固辞してこられたもので、十三回忌に当りやつと御了解が得られ実現の運びとなった。碑文は歌人、詩人であった坂口さんの作品の中から本人の書になる。

地は美しき哉
心ひとつで

が選ばれ、八月十三日、祥月命日に除幕式をする予定である。これに要する費用百一十万円は広く寄附を仰ぐことにしていますので、青山同窓各位の御協力を御願ひ申し上げます。

○世話人

伊藤辰治・酒井謙三郎・君健男・等々力英男・河路貞夫・西村二郎・小柳伴・清水誠一・風間久雄・近藤圓

寄附申込要項

寄附金 一口 一、〇〇〇円
締め切り日 昭和五十三年八月十三日
申し込み先 坂口献吉詩碑建設世話人会

〒九五一 新潟市四ツ屋町一ノ五一四一
近藤 圓 方
電話〇二五二二二一六六三三
銀行口座 第四銀行本店
普通預金口座三二七四八八番

※寄附の口数は幾口でも結構です。現金書留か郵便小為替で郵送して下さい。なお、第四銀行でお振込の場合は振込手数料は不要です。

大正三年新潟中学を卒業、早稲田大学を経て大正十五年、新潟日報社の前身である新潟新聞社に入社され、以来四十余年新聞人として常に在野精神をもって貫かれ、新潟日報社の第一の社長をされた。またラジオ新潟を設立され、新潟放送の初代社長、会長をされた。新聞、放送事業を通じて新潟県の産業、経済、教育、文化の発展に大きな功績を残された。

坂口さんのお人柄は温厚寡黙、慈愛と温情に富み、真に誠実な方で常に真摯な気質をもって事の理非に当られ、各界の信望を一身に集められた。

○坂口献吉という人

若い人達の中には「坂口献吉」というのも知らぬ人もいるかと思うので、簡単に紹介してみたい。坂口さんは、中蒲原郡阿賀浦村大字安寺(現新津市)の地方切つての素封家で、明治から大正にかけて活躍した県政界の重鎮で漢詩人であった坂口仁一郎(五峰と号し

せられた見舞金を基金として県民会館が建設されることになった。坂口さんはその建設準備委員であったが、その敷地が白山球場、つまり現在の場所が最適ということになって坂口さんの大奮闘が始まった。当時この一帯は陸上競技、体育館、庭球コートなどを含めていわゆるスポーツセンターであり、高校総体や新潟国体のメイン会場であった。その名譽ある地へ然も野球場を取り払って県民会館を建てたいというのだから、スポーツ関係者から猛反撃を受けたことは当然とも言えることであった。苦境に立つた坂口さんは私の処

私のお心援に満足する

坂口さんは私宛の手紙で「県民会館敷地問題につき、白山球場に執着する人達を反論し理解せしめるに有力なる資料をお与え下さいまして百万の味方を得たる心地いたし真に感謝に堪えません。しかも堂々とスポーツ関係の責任ある御立場に於いて、日報投書欄にまで力強く一文を御投稿下さいまして感謝の至りであります。四月八

Uターン変わり種(その一) 山内不二夫君(75回)の場合 ——「山忠」四代目——

「新潟のれん」として一角を張る紙間屋「山忠」老舗として歴史は古く、経営は新しい。その「山忠」の長男不二夫君は、昭和四十二年三月青山を巣立った。父忠次氏(葦原会員、慶応大学卒)の薫陶よろしきを得たのか、迷わず東京三田の門をくぐり、法学部政治学科に学ぶ。中村菊男教授を慕って修士課程を経て大学院研究生として大学に残ったが、日本の研究生活にあきたらず渡米。ペンシルバニア大学のウォルトンスクールで経営学修士号を取得した。その学園生活でめぐりあつた恋の相手がなんと、一九六三年から連続八年間、製紙業技術賞を贈られたチユエン・ファ・ホン氏の息女ヘレンさん。スタンフォード大学卒の才媛である。世界を騒がせた米国での多国籍企業をテーマに研究した経営学の修士。そのヘレンさんと一九七七年結婚。不二夫君は父忠次氏の待つ「山忠」の平社員として帰国。不二夫君の後を追ってニューヨークでの残務整理を終えて今月、ヘレンさんが新潟入りする。

等々の立場に立ち、お互い信頼の上で取引すべきです。百年の伝統を持つ「山忠」のすべてをこの一言に読みとれると思うのである。常に経営刷新、近代化を試みる、だが時流に必ずしも迎合せず、独立歩の経営に徹してこられたもの。この信念があつたればこそと思わざるを得ないのである。

薄利多売をモットーに他の同業者をかえりみない商業主義を話題にした時、四代目として「山忠」を継ぐ不二夫君はきっぱりと所信を述べた。



「経営者はコマシヤリズムに甘んぜず、常にユーザー(利用者)の立場も積極的に研究し、販売者としてのモラルを向上させ、

適材適所による経営の合理化、女性労働力の適性配置を含め、労働人口のむだ使いを極力無くす配慮をすること、信頼される取引を目指すべきです」

若い世代の経営者魂をこんな熱く感じたいとは思わなかった。しかしよく考えてみると父忠次氏のリベリズムが実はその底流として脈打っていることに気づくのである。

百年の歴史を持つ老舗と、アメリカ帰りの若いビジネスマンカッブル、この一見異色の組み合わせがやがて新幹線時代を迎え、北陸最大の国際都市となる新潟市の今後あるべき姿を示すものとして期待される面が大きいと思うのである。

虎先生

23回 清水浩一

Kはその時旧制新潟中学一年生乙組の級長であった。今日の兵式教練は第一体操場か第二の方を確かめなければならぬので、恐る恐る教員室へ……ドアを開けて一歩入ると直立不動。精一ばいの声を言ったことが「虎先生、おいでですか。」であった。教員室中が一せいに扉口を見る。慌てて飛んできたのは一年乙組担任の先生「こら、お前、大、ナニを言っているんだ。」と慌てふためきの叱声である。

豈計らんや、「虎」とは兵式教練先生のアダ名だった。本姓は内田。Kは生徒がみんな「トラ先生」と呼んでいるから、それが本名とばかり思っていたのであった。級担任が青くなった、赤くなったりの折柄、傍に声あり「いるよ。トラ、ここに居る。用は何だ。」で、ともかく用は足りた。

内田先生は日露の役に従軍中、朝鮮で虎を退治したという武勇譚が伝わっていた。それが「トラ」の由来で、中学生たちには無類の勇者と崇められていたものようである。

虎先生はいらっしゃいますかと大真面目。◎アダ名だけしか先生を知らぬ、一年生。◎級長ほどやされる分も代表者。(因みにここに出たKは、筆者の今はじき弟。)

54・55期有志の集い 三川探勝の旅

55回山 誠

わが期としては始めて妻子づれの旅を行なったので紹介致します。三川における清野君の協力によりわらびとりの話が五月上旬に急にまとまったが、今回は手紙で全員の参加募集も時間的に間にあわず、連絡のとれた有志とその家族

家族ともども ハイキング



水溜りもあるが、一歩一歩登る。わらび取りを行なう場所は、東蒲原の連山がとて雄大に美しいなごめところだ。散開してわらびを探すが、なかなか見つからない。やはりコツがあるらしく、短時間で相当収穫する者、何もとれない者等さまざま。一時間余り経過し、松井君が「下山」の声をかける。すべつてころばないように順々に同じ道を下ってバス待つ所まで歩く。予約しておいた三川温泉、ホテル「三越」で休憩、食事をする。ここでマイカーでかけた小林一彦君と一緒になる。食卓の山の幸、鯉料理を酒の肴に、同期の顔、その妻子の顔を見ながらの酒、ビールの味は最高だ。多酔が廻ったところで各人自己紹介、近況報告、家族紹介を行なう。帰り時刻迄は、入浴したり、寝そべったり、話したり、ゆつくりつるぐ。

清野君より一家族に、わらび一束、椎茸一袋つつをみやげに貰い、参加一同恐縮する。帰路は同じバスで三川村の国玉平等寺に立寄り平維茂の巨大な墓や天然記念物の将軍杉を見学する。安田町でも有名な孝順寺で、豪華な建業、部屋池等の説明を青山58回卒との任職より受ける。

の参加で決行する。快晴の五月十四日(日)八時半にバスセンター脇を集合場所にして貸切バスで出発することとする。定刻にはなつかしい同期の桜、その家族も揃って旅の楽しさが充滿する車内の点呼を終え、いよいよ三川に向け出発進行。道中のごとは省略。十時過には三川に到着。本日の案内役をつとめ、自己の山をわらびとり提供してくれる清野君を迎えてくれる。マイカーで医師の金子君が看護婦同行、薬まで用意して待っている。三川君による記念撮影。川に沿ってしばらく歩く。やがて目的の山に入り、道のないところも、

更に水原町走行中は、水原の助役をしている前田君から説明を受けた。三十数年前の思い出話、失敗話、なつかしの歌で笑いや楽しさ一杯の車中であつた。夕方新潟市内に入り、三々五々と各所で途中下車、別れをつけた。

54・55期 くさりの会 一月十五日挙行



54・55期 恒例新年会 一月五日挙行



砂丘の思い出

28回 海潮音 (村田汎愛)

「彼女は散歩のおり、彼女の好きな月見草の種を描いたが、現在の新潟海岸に咲く月見草は、これが広がったものと伝えられる。」云々。(彼女とは日本最初の女学校、横浜のフエリス女学院の創設者、ミ・キターのこと。明治二二年新潟英語学校の教師として現在の新潟市寄居町に住んでいた。この記事が、ゆくりなくも私に生徒の頃を思い出させた。

母校の裏は砂丘を越えると日本海が見えた。当時は防風林といってもまだ矮小で、すり鉢の底のような日溜りの砂地には、春はレンゲ草が咲き、夏は月見草が、秋はグミの実が赤かった。入学した時の組主任は岡村昌太郎先生であった。先生は博物担当で、一年生の時は植物、二年は動物、三年は鉱物と教えて頂いた。先生の授業は教科書の説明だけでなく、手近にあるものを教材に用いられ、豆料の花式図の講義には砂山に咲く紫の花をつけた豆科のつるを探ってこさせたことを思い出す。校庭の隅の蝦蟇は動物の時間の教材であり、鉱物の結晶体の講義の後では宿題として明礬の溶液中に糸につるした明礬の塊を入れて結晶

先生、北沢・山本の先生方であった。国語は下級の時は田村先生、上級は丹羽寿雄先生だった。授業レベルについてはあまり記憶がないが、それでも『太平記』の中の「落花の雪にふみ迷う片野の春の桜狩り」や吉野三絶の「眉雪老僧時止掃・落花運気説南朝」は忘れられない。先生は脱線が大好きで私達もそれを歓迎した。良寛さんの話やら万葉の弥彦の「いやひこのおのれかきびあおぐものたなびく日すらさきめそぼふる」は今も忘れない。私の良寛への傾斜は先生の漫談のおかげである。先年国土寺・五合庵を訪れた帰途、同窓の阿部藤策さん(母校の校長であった)に会った時、英文専攻の私が何故国文学に興味をもつのかと不審がられたことがあったが、これはひとえに丹羽先生の感化によるものだ。弥彦と云えば五年生の春弥彦神社の外苑に新設の昇宮陸上競技場で運動会が行われたが、昼休みを利用して五合庵には故渡辺憲一郎君だった。良寛思慕は私だけではなかったのだ。

その運動会総合優勝したのは最上級の私たちだった。神社の大鳥居の前で記念撮影をしたが、優勝旗をもっていたのは級長北村喜次君で小学校からの友人であった。在学中、校長先生は、小平、三根、八木先生と三人になる。恩師の先生方のお顔が浮ぶ。友人たちの面影が浮かぶ。懐しい古い顔々々

思い出

34回 山崎重二郎氏の、配属将校栗栖閣下の記事を拝見したし、栗栖閣下とは中学校以外に豊橋の陸軍予備士官学校で再度お世話になった当時のあれこれ思い出して一筆認めました。

昭和3年新潟中学に入学当時の配属将校が栗栖猛夫閣下(当時大尉)で、北鮮会軍歩兵第75聯隊から甲種幹部候補生として、昭和14年11月1日豊橋陸軍予備士官学校に入校した当時の歩兵隊の生徒隊長が栗栖閣下(当時大佐)で、11年振りにお会いした。

当時満鉄に勤務していた兄、信(37回卒)は満州で何回か閣下にお目にかかって居り、小生豊橋予備士官学校の際には栗栖大佐が居られる旨通信して来て居りました。予備士官学校では、毎日毎日高師天伯原で猛訓練を受け、週一回の日曜日に外出を許可されたのは豊橋予備士官学校だけで、之も栗栖生徒隊長のお力によるもので、剩る日曜祝祭日の連休には外泊も許可となり、新潟も年末年始と4月末の休みに帰省したことを覚えておきます。将来将校となる候補生のこと事故など起こすことはいない、若し事故発生すれば自分が責任を負うと校長黒真蔵少将に掛合い、実施されたもので、在学中事故のあったことも、それにより外出禁止の措置もとられたことがなかった。週休2日制の現代の人には笑

栗栖閣下の思い出

40回 土屋均

咄としか思えないだろうが、月火水木金の訓練の中の休日(日)は、河川近くの民家に半宿、夜半に集鬼の首でも取ったような喜びであつたのです。

外出の折よく栗栖隊長のお宅を、お訪ねし、一家総出で歓迎されたこともあつた。偶々話が高湯中学にさしかかったところ、戦斗帽にヤモ先生のこととなり、栗栖隊長もシャモ先生を、国室的存在だ、と激賞されており、二人で寄せ書をしてシャモ先生に送ったことも覚えて居ります。又新潟中学校へ配属将校として赴任した時には、栗栖隊長は胸上げをされながら中隊から中隊へと申し送られた様な歓迎振りであり、その候補生間の好意は絶大なものであつた。

小生戦地へ出てからも度々激励のお便りをいただき、公王嶺の教導学校長として来進された折栗栖少将名の葉書をいただいたのが最後だった。戦後戦史を見たのがフィリップ島のレイテ島で苦戦をされ、最後まで頑張り、ゲリラ活動をされたらしい。

伊藤正徳氏の「帝國陸軍の最後」によればレイテ作戦で最も期待された日本最精鋭の独立混成旅団長としてレイテに上陸されたそうだが、氏実兄故志昂君(新潟商業出、参院議員志吉裕)が居り、同じ釜の飯を食って苦勞を共にした仲間でした。

隊長統監の生徒隊演習が行われた。豊橋を出発、演習をして乍ら竜川の子部隊だったとか、不幸にして上陸の時機遅れ、制海、制空権は米軍の手中にあり、目的の上陸地点に上陸出来ず、擱坐上陸で武器も殆んど持たず上陸したらしい、日、本坂峠を経て、浜名湖一周を全く頼り出して豊橋手前の本坂峠にさしかかったところ、戦斗帽に栗栖隊長の頸紐を掛け、馬上から叱咤激励された栗栖隊長今尚あの勇姿が目にと激賞されており、二人で寄せ書をしてシャモ先生に送ったことも覚えて居ります。又新潟中学校へ配属将校として赴任した時には、栗栖隊長は胸上げをされながら中隊から中隊へと申し送られた様な歓迎振りであり、その候補生間の好意は絶大なものであつた。

小生戦地へ出てからも度々激励のお便りをいただき、公王嶺の教導学校長として来進された折栗栖少将名の葉書をいただいたのが最後だった。戦後戦史を見たのがフィリップ島のレイテ島で苦戦をされ、最後まで頑張り、ゲリラ活動をされたらしい。

伊藤正徳氏の「帝國陸軍の最後」によればレイテ作戦で最も期待された日本最精鋭の独立混成旅団長としてレイテに上陸されたそうだが、氏実兄故志昂君(新潟商業出、参院議員志吉裕)が居り、同じ釜の飯を食って苦勞を共にした仲間でした。

隊長統監の生徒隊演習が行われた。豊橋を出発、演習をして乍ら竜川の子部隊だったとか、不幸にして上陸の時機遅れ、制海、制空権は米軍の手中にあり、目的の上陸地点に上陸出来ず、擱坐上陸で武器も殆んど持たず上陸したらしい、日、本坂峠を経て、浜名湖一周を全く頼り出して豊橋手前の本坂峠にさしかかったところ、戦斗帽に栗栖隊長の頸紐を掛け、馬上から叱咤激励された栗栖隊長今尚あの勇姿が目にと激賞されており、二人で寄せ書をしてシャモ先生に送ったことも覚えて居ります。又新潟中学校へ配属将校として赴任した時には、栗栖隊長は胸上げをされながら中隊から中隊へと申し送られた様な歓迎振りであり、その候補生間の好意は絶大なものであつた。

小生戦地へ出てからも度々激励のお便りをいただき、公王嶺の教導学校長として来進された折栗栖少将名の葉書をいただいたのが最後だった。戦後戦史を見たのがフィリップ島のレイテ島で苦戦をされ、最後まで頑張り、ゲリラ活動をされたらしい。

伊藤正徳氏の「帝國陸軍の最後」によればレイテ作戦で最も期待された日本最精鋭の独立混成旅団長としてレイテに上陸されたそうだが、氏実兄故志昂君(新潟商業出、参院議員志吉裕)が居り、同じ釜の飯を食って苦勞を共にした仲間でした。

二十年前の 女子高校生

67回橋 本 秀子
(旧姓 塚原)

新潟高校を卒業して二十年近く、
そして私はそのまま他の土地に住
みついて、同窓会誌の存在すら知
りませんでした。その私が先日久
し振りかへり、高校時代の友人
数人と十年か振りに談笑の一時
を持ち、懐旧の念に駆られてこの
原稿も引き受けてしまいました。

高生は「学年百二十二人とか……
私達の頃は、女子学生が入り始め
てから六、七年目とかで五十人に
満たない数でした。男生徒のみの
二クラスと、十人位ずつ女子の混
じる五クラスとで学年が構成され
ていました。当時の事を思いつく
まま記してみます。

国語の授業、特に源氏物語の時
など、微妙な気配のあたりになる
と、遠藤先生は「女子のいるクラ
スはやりにくいなあ」とのたま
い、男子だけのクラスだと、どん
な授業になるのかなあ?と、当
時の純情な乙女達は不思議がった
ものでした。何せ今のような女性教
育などという言葉さえ聞かなかつ
たのですから……。

体育の授業、二クラス分で二十
人位の女子が村山先生という素敵
な先生に楽しくダンスを教えてい
ただきました。ワルツステップも
この時習い、大学で社交ダンスの
授業をとりましたが、男性と組む

のがいやで単位を落し、未だに高
校時代のステップが出来ません。
家庭科の授業も忘れぬ事が出来
ません。運悪く(?)私達の学年か
ら、指導要領の改定で女子の家庭
科が必修になってしまいました。
それが、呑気者の私でさえ大学受
験の為にせり出した三年生の二学
期からだったと思います。放課後
男子は下校してしまっているのに
女子だけが一教室で、中央高校の
家庭科の先生に講義を受けるので
す。しかし時期が時期であるし、
マジメに受けている人は数えるほ
どだったのではないかと思います。
試験の出来は悪い、内職はする、
でひどいお説教を頂戴したもので
す。何を教えて頂いたのか全く記
憶にありませんが、現金なもので
中央高校まで向出してやった調理

実習だけは今もよく覚えています。
クラブ活動。女子はお客様遊
び半分のいい加減な練習(失礼!
私だけだったかも……)でも人数
が少なからずすぐレギュラー。で
も出るに負けずレギュラー。で
だけかな?)
女子が少ない高校だった、とい
うと必ず「さぞ大切にされたので
しょうね」と言われます。クラブ
活動などで甘やかされていた、と
いうのは大切にされてきた事なの
かもしれません。いわゆる「女
性」としてみられてはいなかった
ような気がします。何かという
「中央高校でね……」とか「中央
高校の○○さんがね……」とかの
話を耳にしたものでした。運動会
などというところでは持ったかな
りの男性がくり出していた様です。
魅力的な女性がなかったのか、
という点で決してそんな事はなく、
個性的な素敵な人がたくさんいま
ました。上級生で演劇や音楽面で活
躍されていた方など、私達はいつ
も何て素敵なんだろう、と思つて

母校の近況 女子入学123人

今年の母校新入生は総数四百五
十名、内女子百二十三名を数えた。
始めて本校に女子が入学したが、
昭和二十五年で、七名が受験、全
員合格であった。その年、男子合
格は三百二十名であった。以来、
除々に女子の合格者も増え、五十
一年度は九十六名志願八十七名合
格、五十二年度は百一名志願八十
名の職業人としての夢などを皆で話
し合ったものでした。今、夢破れ
て、三人娘の母親業と女房業しか
ない、そして四十才までである何年
か……。男性はもち論、何人かの
彼女達も、堂々と世の中堅所とし
て活躍している姿を目のあたりに
すると、ただ年のせいのみでなく
将来を夢みるという同列にあつた
昔が懐かしい気持で一杯です。
(金沢在住)

大学別合格者数

大学校名	51年	52年	53年
(国立大学)			
北海道大	2	6	11
東北大	32	38	29
東京大	6	8	9
東京工業大	5	2	4
一橋大	5	6	3
筑波大	5	4	3
新潟大	97	97	96
京都大	4	4	8
秋田大	12	4	5
山形大	12	10	10
信州大	10	5	14
東京外語大	3	1	3
東京学芸大	3	3	3
東京農工大	5	3	3
横浜国立大	4	2	1
(私立大学)			
青山学院大	30	18	30
学習院大	13	17	14
慶応大	46	47	37
国学院大	1	6	10
国際基督教大	3	4	1
芝浦工大	19	8	18
上智大	12	12	12
成蹊大	5	9	5
中央大	56	45	60
津田塾大	5	15	11
東海大	10	6	6
東京理科大	34	44	54
東洋大	13	8	7
日本大	33	34	50
法政大	28	26	31
明治大	48	54	35
立教大	13	11	12
早稲田大	81	65	71
同志社大	13	7	7
立命館大	18	7	8

昭和52年度青山同窓会費納入者追加分 (53年1月より3月までに納入のもの)

期及氏名	期及氏名	期及氏名	期及氏名	期及氏名	期及氏名	期及氏名	期及氏名	期及氏名	期及氏名					
清水浩一	吉田英一	高野雄一	45回 邦直	49回 弘光	北塩村善省	茂知次	54・55回 坂本	55回 修林	菊山公重	成行三	風川安白	間川厚	土祐三	郎之厚
27回 田上卯吉	35回 山本謙久	中野口義一	46回 寺間豊	50回 美弘	52回 秋康	由彦	56回 坂本	57回 稔	山本幸三	三一藏	安白	65回 宅井	67回 井彰	子仁
28回 田沢愛一郎	37回 正正	43回 山永	47回 池田	51回 山田	53回 藤藤	康興	58回 藤藤	59回 陽	60回 守卓	雄史	吉中	68回 井野	68回 村中	作弥
30回 品元克一	38回 奎吾	久正	48回 津日	52回 佐藤	54回 藤藤	良義	60回 藤藤	61回 陽	61回 芳	夫彰	北田	69回 秀	70回 秀	昭
31回 藤静午	39回 栄助	田義	49回 重義	53回 谷田	55回 藤藤	昭二	62回 藤藤	62回 陽	62回 芳	夫彰	田	71回 秀	71回 秀	昭
32回 原六郎	40回 英正	川義	50回 喜	54回 井井	56回 藤藤	和昭	63回 藤藤	63回 陽	63回 芳	夫彰	田	72回 秀	72回 秀	昭
33回 磯部佐吉	41回 秀昇	川義	51回 喜	55回 井井	57回 藤藤	和昭	64回 藤藤	64回 陽	64回 芳	夫彰	田	73回 秀	73回 秀	昭
34回 野島力	42回 隆	川義	52回 喜	56回 井井	58回 藤藤	和昭	65回 藤藤	65回 陽	65回 芳	夫彰	田	74回 秀	74回 秀	昭
清高	小	野	53回 喜	57回 井井	59回 藤藤	和昭	66回 藤藤	66回 陽	66回 芳	夫彰	田	75回 秀	75回 秀	昭